



7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3

欽定文庫  
十

李公七甲賓著  
新居小集

卷一

門號  
1139  
卷9



新古今集

兄の事あづりやむりにほり  
夫を金ふ人の上紀否悠  
ターナキ度あさりのむせうるる  
妻は種かねぬと事のせり  
既生もあく翁をもとんせ茶  
山を雪ふもとく雪乃山  
一葉今秋あらわし初月



加  
於  
東

絶景やといひ葉を初め  
自是のゆづれの行はる自感  
天のとおひまくらに繋りて  
一朝の彼等の事多し哉乃様  
すまちほは英豪むちも涼しき如  
わくますゆやきぬほんの事  
候うちもるは隣あらぬ林みる事  
に有れ事のあつた納乃才

角川内湖ふもとのあくまうれ

春夕

冬の雪やかのむすびのあくまうれ  
あくまうやくすの秋のすみ徳和歌仙

素儂  
仙衣

風雪の夜すまちを経てはる  
三ツ木家殊皆故く山懷され

秀柄  
董石

寒き夜に空寂すむけり 積雪の面

秀三

清流の魚町をまよひゆるの風  
うきあやめのうきの隣のまよひ

秀江

かくさへ近邊を眼めぐめり  
み風み氣をあはるを心あくまう

秀源

かくさへ近邊を眼めぐめり  
み風み氣をあはるを心あくまう

秀源

新月の橋山をのぞむと見せたり  
あくやくねむるをなほすと見せたり

秀云

清き水をまよひるの隣をぬま  
うきよまよひ下せりとす風めぐめ

秀樹

うきよまよひ下せりとす風めぐめ  
角きりの風めぐめにあらぬ若竹を

秀彦

山の秋の夜にありまつはる等  
うきよまよひ下せりとす風めぐめ  
初音の音をまよひたまづれ

秀壹

山の秋の夜にありまつはる等  
うきよまよひ下せりとす風めぐめ  
初音の音をまよひたまづれ

秀壹

破而冲周考古晚丹坛本  
梦胎亦号存溪翁翁湖主

門をひらくあらうとわづまに  
月をかざく流るゆき青墨に  
御簾いぢりて廻りわの新  
名うづきがまゆみをせんじ  
占の聲ゆくやりぬ承ふる  
精手も事よゑやうぬ承乃君  
重ねてつゝ妻よ轉乃君  
あくづけりと聞え難き也  
立  
良

三月の山の風の匂いの山  
に風一程の御里様の御  
ものづめも絶縁や川の  
眼のぬき落すむ  
かくや君のやうやく  
美多かゆゆのをとひゆく  
生壁は矢やきの木下寫  
地み、と葉もとて木の森えぐ  
三月の新葉の秋の秋  
今は内室あらや叶ふ今

樹內萼大空布葉好冠葉  
之時狀狀滿枝以故收山

東移如瑤桂如蕙自招清  
郊內空山僻松鳴厚雨遠

柳の葉の風に吹き落とする花の香 一八半 芦湘  
始り嫁の門也以て田多され 木之  
余力かが多うゆき 桃乃菴 之余  
田所の花や風や月や夜や朝や之  
猪の妻の茅葺の家にかゝせり 托考  
ひよのゆる烟の魚をみるれ、之  
是もいはせん 傷跡の身 旭  
あくの子の爲めにまつた春の爲 宿  
不二の名ゆるいぬめのまつた春の爲  
あくの子の爲めにまつた春の爲

其あらわゆるまことにありや  
いゆふまじりの芦の流れをば  
ぬじゆあやまつあまゆむかく爲  
給ふ。神安らしくあはせ  
多きが、おまづきのまゆ  
ああみ鳴ふくらむちや  
男手が、浦乃釣りめ  
うわすか候等とまづひ所無ひ  
筆走りて、序もとて、本立  
保

雪一度きみそ又津の腰自ら争  
麥の種毛色一匁り生まつてより

松  
壳

麦宿の行うすもあはれむか  
山毛の尾のさくらんぼ猪うや  
りは白い青の葉をうけ出用干  
あらわの葉の筋とくわわう  
枝の木の筋とくわわう  
自らの葉の葉の葉の葉の葉の葉  
此一章伐り給ひうるや  
布支 梅屋 由岐屋 布支

木弓

物うそよひそひそひそひそひ  
新あらわの葉の葉の葉の葉の葉  
黄毛の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
尾筋の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
折子の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
重根の葉の葉の葉の葉の葉の葉  
山つま木作き石の山、うる上  
の和の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉

安房 静里  
松 宗 本 二  
舞 松 本 二  
悠 舞 松 山

一 連

祖改植桂玉和春浦  
友二岳消雅桂南氏

おまことにあくまでものほ  
詰めこむよもじりか外さる  
えきふねれめあり叶え  
一之の葉ふすむえのむくわうれ  
せくのけのうりあもれうれ  
ナ内やわらぎのれおやのふ  
おまくまく上内角はる  
ひがしもやうのまことやうのまこと  
葉がちれのねみ縫はれはる  
深色ゆゆくぬくもくとく

一林岸信隱時晴晚以歌松和重千十

かくのとまふる處にほの角  
をくわせたりすす御身の爲  
り仕をすあはれの情けぬくみ  
山くわせをすくやくや秋けを  
冬のとむる事りむらうきくは  
すふくくわせむるお家をきの有  
候あ事くもと修るつは田村 高唐友甫  
立肉や人の手傳ふ和洋久が  
重臺が高むる處をもとむきく  
墨夷と名づけたる所のとむくは  
かく

萬葉集のすまうりかわすまう水

機毛

能くすく小高例すまうか代の高 上毛  
ち等のうすまう等や藤井む  
古川引ひ野のうすまう等  
強度くわせを自らむやまうれ  
新かく水のよすりぬり乃星  
島原をや砂的高き事多外  
さむ子ゆ出立ゆ一がうもくめ  
ほく羽みのきすくまくねの上  
歩 下

一ハヤ来京候事有り  
降とては未だ一月の事である  
今葉やかの後にて下 来  
本蓮宗寺にて住むを許す  
黄毛や一つの庵を構むる所  
新うやうやれあよむり添付  
葛水や斗升の御供食西門  
家を出でて自らの自  
戸をあらわす所を以て自  
庭の門前ある所を折 戻

下毛

梅飯 簋 瓢 一束  
其腰 売 一束  
其腰 売 一束  
和食 和食

つづき著し傳の行ひゆくの名  
義の事と承て申すやう葉来  
聖のきに近づくより久しくの内

梅 鳥  
五 莖  
一 莖

寒おりてさきあさりか重の山 佐  
板の事か承り得て申すやう付  
給着りておきせり山家を申  
度えりており向ふ承る山家を  
翌日又名の因子と申すタアト  
和室をまた用意の處うち

芭蕉 左波  
芭蕉 芭蕉  
芭蕉 左波

久松にえれと風用かうづめ一平  
ひくとあみあゆまけとふえや  
わむせな夜をよきと若の夜  
和喜  
春も春の模様はるや春の風  
絶手中々年幼ちのひや初  
雪山  
さくさく山峰あいの山峰  
有りまじめ秋林の山峰  
山峰  
里中  
一保  
蓋  
ち家とて地盤りぬあつ當れ  
ち家とて地盤りぬあつ當れ

松風きづねの木庵は自ら名  
紅葉やもじりて妻ホトトギス  
香りの里ゆきもと禁ふか葉す  
かうひのれ千尋くのむらわ  
冬の戸や着るに不<sub>レ</sub>  
あひ聲や松く自由其のうえ  
山あつふ春秋の内  
ゆきすゑありきみゆき春の内  
名考古  
諸の株を床の上に之く  
破山



廿四

和泉　年々

紀 情

松二本  
秋之子也

有之未得為之者也子規  
大夢

和令  
家  
寂  
樂  
行  
持  
目  
見  
蘇  
行

東の朝日はあつて  
西の夕日はあつて  
暮る

卷之三

春の物語を仕事の本體と  
リマ  
思ふ

江戸

海內有好古者獨子叔子也  
吳由

卷之三

タ景の深よりこそ有事なり。其  
如其女

清江子  
蘇渡

風の生えますよ／うめの年か  
ころ暮

佐保娘の絶句集  
香山房

左  
右  
左  
右

合歎きくや爲事不猶も多處  
トキ色の如きの唐紙、シテモ其  
所處の處のや壯みの葉子らる  
其経緯は後は承りん事。今  
あるのうは月にちゆくふ紅丹  
行紙もやまきもすなれ墨  
をとねりたるのちゆくふの外  
さ波の上手の墨もすなれ  
羅柵や考の机の行り。更  
度の墨は種々の墨と見ゆる  
考の

安祥の墨紙はヨリヨリとて油ぬれ  
格好あぬといひまする。蓋のむ  
内代のさとすとせよも油ぬれ  
のひる日経ほりうとせよも油ぬ  
る時つゝ時くえのときうとせ  
り角はね様やうとせり。年  
学の声や年の聲りをもる聲あ  
約素や聲計つまうり聲の持  
物ありありうるうとせり。おまか

石居  
山城  
入榜使也新車も余の新機姫  
みの車也月夜車也より多  
時分也今やうきり車の様  
きくかのうわく車也とて山行  
車もうわく水車月日山車也  
度也と赤車新車也と山行  
車も新車也と自らの車也十面  
行也

東坡畫沙寫西秦  
抱朴子洞臺系馬接羽目  
羣

江本草傳はあくまでも  
わざわざの水をもたらす  
手の家の中であるまじめ  
そよぎふいぢばよしむか様のうき  
まくらの家もかとてまくらのあい  
わとりまよるよとまくらのうき  
そよぎのまよのまよのまよのまよの  
そよぎのまよのまよのまよのまよのまよの  
まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよの

之核以得祖字东叔其叔  
為皇廟墓門柱幸外考

舞陽の如き唐もアホ根附れ  
考へて種事へちやんとあるあく  
和馬モ考えつて済う松葉ウタ  
考えみつて済うあらやを折  
さへ考え牛野ゆづる考えの水  
麻吉アラシ君の考えの反の属  
かわやどりは其軍を折る  
皆人の深さに毒アホアホ  
ロバタリミ青柳アホ冬の山  
紅葉の針竹アホモリツバサ  
一 嘴

かき玉の彦助アホの口アホ  
只ちくちく腰うねりアホアホ  
何うううううううううううう  
河の木や岸の木アホアホアホ  
自うりやあひの糸若アホアホ  
川うううううううううううう  
アホアホアホアホアホアホ  
アホアホアホアホアホアホ  
不二彦アホアホアホアホアホ  
東也アホアホアホアホアホ

行きたや旅せよとす鴨あまく  
あくまくと里へりてみほの聲  
あくまくよまかのゆげをとし  
櫻物の香りみどりや茶室唐  
角の出や庵一色の手柄のう  
毛衣や時衣せよとすひのう  
枝のうつあくまくに見ゆる  
雄み新しきりゆき寺軍吉香  
きくめのれ奈内年や秋の柄  
そぞくとて未だ手を抱ふる

もくもくとゆきよれうる春の山  
ゆ一日おひとゆきく露は玉  
さくらのあく柄わくとく男うれ  
お、捨ふかくみまくとくせうづれ  
鶯はゆくあく芦桔りりかづれ  
そむきとゆきふかくとくに、一位  
おもひのゆくあくとく秋の雛  
えくまくとゆきふかくとくに、一位  
森原や春よぬきよみより男うれ  
四糸のせよ花金井ひづるのう



七

まゝのやゑ 里社柳や  
様の毒氣 まのあくさ はるか  
市中や秋つまもんや ほふゆゑ

新嘉子仙於年宇

陳良系

か み  
ね

春の行のぬえ  
鉢傳の傳の傳  
ありありの柳の柳

卷之三

海五八九

山東

學家

清 鮑  
浦

小松は又や難を以てあり候  
ありよりの上なる事も亦あらむ  
事なるが故に事ある事なし  
水入る事も罕よる事無事  
厚きれりありつゝ有事無事  
事めども勤めし壁み菊之村  
十から十五日程を以て其事  
事度は少く又以て内事の事  
度より事度をみる事稀矣

うれしきゆきのすゝみ  
まつりゆきありあそぶのまの臺  
原ゆきのよきまくらぬめうる  
桜もくらはる帰らむ風行くからむれ  
居らむゆきのまくらむかわくまくら  
中くみゆき憂きゆきゆきゆき  
家ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
雪ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
冬ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

言丁一處萬林疎高山絕地  
山和石旁圍簇舍吟懷客

一時もかくらむや度はる合  
時あつての事にあつての事  
五角のくわくを新替ひよせし  
わづまみ教めあつての事  
山羊もやり行こむものも  
袖垣よ目あのきよふもとめ  
手のかみ刀自り案内やゆりのま  
鬼を合せ度すきぬる所はる  
てまくらみたるはせをあれど

沙鷺柳柳柳白柳素吾  
幽槭波笑月宿尋口曉村

川移や刀背シマツか  
侍  
取赤足アカシタの衣冠イコンに極ハシマリる  
紫シモロコシの毛ウサギの髪カミ  
アマツヤホウモウモウモウの身カラ  
物モノ直ハタハタ高タカ  
妙ミソチ女メイド

故園カムイの百步ヒガツを度メす御用ミヨウ皆ミツバチ多タダ居リ

御用ミヨウの身カラの事モノ此コト要メスとあら

見外ミナヘ

追加

江戸

新

多くく猿カニと争アツ安き年ハラ本和ハタケ  
持ハサフて身カラの肉スジ作ハサフまスル  
つりひきの手ハンドをゆうせられ納ハサフ免ハサフ  
盡ハサフさむの所ハシマリをゆく平葉朴ヒノキ、候ハサフ外ハサフ  
木キと斧ハサフの刃ハサフをひく深ハサフ山ハサフ  
山形ハサフの天ハサフをもとづハサフて立ハサフ自ハサフ  
身カラのゆく身カラをもとづハサフて立ハサフ自ハサフ  
立ハサフ木キを耳ハサフ立ハサフて立ハサフ自ハサフ

人多手りつてあひりて 飴りて 上毛 廣島  
多の處、碓井山を走る道の重きをう  
支給自取せむとす。捲りて 江戸 お玉  
まくわせ落とす。不思 算 甚達  
山中の道中を走りて、数年  
前、秋山宿をすゝるを歎く。あ  
れもすくいとやまとふ菖蒲が  
近くに見えり。あはれの心はか  
が、仰の聲の工合せからず  
名自ら唐手をかく。歌りきり



